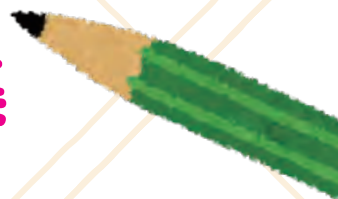


第1回

いの ふれあい大賞

作文コンクール 入賞作品集



主催 公益社団法人 福岡県医師会

共催 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援 福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、
北九州市教育委員会、朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社（順不同）

目次

表彰式	2
主催者あいさつ	3
入賞作品紹介	
一般の部 最優秀賞	4
一般の部 優秀賞	6
一般の部 優秀賞	8
中高生の部 最優秀賞	10
中高生の部 優秀賞	12
中高生の部 優秀賞	14
小学生の部 最優秀賞	16
小学生の部 優秀賞	17
小学生の部 優秀賞	18
表彰式の様子	19
選考委員	20
募集要項	21

表彰式



(平成27年1月10日(土) 福岡市・エルガーラホール)

二列目

●一般の部 最優秀賞
松本 悠さん

●一般の部 優秀賞
中村 沙世子さん

●中高生の部 最優秀賞
小野 愛来さん

●中高生の部 優秀賞
川端 君佳さん

●中高生の部 優秀賞
岸本 妃呂子さん

一列目

●小学生の部 優秀賞
小浦 那実さん

●小学生の部 優秀賞
香月 凜保さん

●福岡県医師会会長
松田 峻一良

●西日本新聞社生活特報部長
長谷川 彰

●小学生の部 最優秀賞
角町 玲葵さん

●一般の部 優秀賞
郡島 久美子さん
枠内

主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会
会長 松田 峻一良

福岡県医師会では今年度より福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞―わたしのまわりの医療体験」事業を開始いたしました。これは、医療従事者と患者、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて、病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集するものです。

寄せられた作品の中から、優秀作品を発表することで、県民の方々や医療関係者の方々の医療に対する意識を高めていただくことを目的としております。

今年度が第一回目の募集にもかかわらず、一五〇点を越えるご応募をいただき、選考の結果、一般の部・中高生の部・小学生の部からそれぞれ最優秀賞一名、優秀賞二名の合計九名の方々を選出し、表彰させていただきました。

本冊子では、受賞者の方々の作品をご紹介しますので、ご高覧いただけますと幸いです。



入賞作品

一般の部

最優秀賞



春日市
松本 悠 (36歳)

「ありがとう」

「生まれますね。」

今までに三人の子どもを出産した私が、この言葉にこれほどまでに勇気づけられ、覚悟を決めることになるとは、想像もしていませんでした。

四人目の赤ちゃんが女の子であると教えてもらったその日に、家族会議で

「笑羽」ちゃんと決定しました。子ども達が譲らなかつた名前です。その時から「わらちゃん」は子ども達の妹として家族の真ん中に存在していました。八ヶ月健診でのエコーにより、横隔膜ヘルニアという病気が見つかり、大学病院へ転院しました。横隔膜ヘルニアは手術すれば治る病気であるはずでした。18トリソミーという染色体異常でなければ……。

わらちゃんは18トリソミーでした。生まれてくることもできないかもしれない、生まれてきても生きられない……。私自身にできることを探し続ける日々が始まりました。考えても考えても私にできることは何もありません。病名を聞いてから約二週間、「とにかく家族と一緒にこの小さな命を大事に守り続けよう」と過ごす毎日の中で「もう一度、これからの話を聞きに行こう。」と主人と病棟長のH先生に会いに行きました。

H先生は静かに向き合い、私たちの話をじっくり聞いてくださり、ゆっくり答えてくださいました。H先生の口から出る言葉は、厳しい現実ばかりでしたが、眼鏡の奥から見つめる目は、真つ直ぐ誠実でした。

そんなH先生から、破水し陣痛が始まりだした時かけて頂いたのが、「生まれますね。」

の一言でした。「わらちゃんに会えるんだ。」という実感で何も恐くなくなりました。

主治医のN先生も駆けつけてくださいました。検査入院の時から、いつも周りに穏やかな空気をまとい、「大丈夫ですかあ。」と来てくださり、何だかほつとして「はい。」と答えてしまうような方でした。今回もいつも通り「大丈夫ですかあ。」「はい。」と。

私たちの様子を気遣いながら、腰をさすり続け、しっかりと指示してくれた看護師のSさん。以前から知り合い

だったように安心感を与える会話をしてくれた看護師さん。

たくさんの方に囲まれ、主人も立ち会うことができ、わらちゃんは自分の力で生まれてきてくれました。そして二十一分間、私たちの間で生きていてくれました。その後三日間子ども達も一緒に過ごさせて頂きました。

看護師のSさんは、夜中にわらちゃんの手形と足形を手作りの可愛いカードに残してくれていました。子ども達がわらちゃんとの初対面で、すぐに「かわいい！」と抱っこしたことを一緒に喜んでくれました。こんな時でも「お母さん、寝ないとダメですよ。ごはんも食べてないでしょ。」と叱ってくれました。病院で過ごす最後の日、見送ることができないからと汗だくで、「わらちゃんに似合うと思って。」とピンクのお花を届けてくれ、抱っこし、いっぱいお話してくれました。そして、母子手帳にまで、そつとメッセージを添

えてくれていたことを後から知りしました。

わらちゃんを抱き、泣いたり笑ったり、一緒にいてくれたみなさんで送って頂きました。H先生が長い間手を合わせて下さる姿を見て、命と向き合い続けている先生は、わらちゃんにどんな言葉をかけてくださっていたんだろう。と今でも思うことがあります。

わらちゃんを出産し、小さな命の奇跡に感動し本当に愛おしく思う温かさでいっぱい自分の気持ちに驚きました。悲しみや寂しさよりも大きな穏やかさでした。

それから三ヶ月。自分の中に沸き上がる様々な気持ちと対峙しながらの生活ですが、わらちゃんの肌や温もり、重さを想いながら、大きな穏やかさに包まれたままでもあります。子ども達も少しお姉ちゃん、お兄ちゃんになり、変わらずわらちゃんを大切に！大切に！想っています。

私も家族も前を向けているのは、周りにいてくださる方々の支えのお陰です。その中でわらちゃんが生きた輝く瞬間を共に過ごしてくださった先生方や看護師の方々と出会えたことに、強い力を与えられたと思っています。人を、命を、それぞれの関わり方で一生懸命守り、寄り添って送り出してくださる方々に背中を押された気がします。ゆっくりとグーに結んだわらちゃんの手が運んでくれたことを感じ続ける第一歩となりました。

〃ありがとうございました〃





入賞作品

一般の部

優秀賞



福岡市
中村 沙世子 (34歳)

「二つの出逢い」

「このまま、入院して下さい。病室に案内しますので、すぐに点滴を始めましょう。」

私は、妊娠三十週目の妊婦だった。いつもの妊婦健診のつもりで診察を受けると、そのまま緊急入院になった。入院原因の病名は、切迫早産だ。正

期産（妊娠三十七週目）以前に、早産になりかかる一歩手前の状態だ。

私の場合、十分間の間隔で規則的な強い子宮収縮があり、いつ陣痛に変わり、早産してもおかしくない危険な状態だった。

着の身着のまま、点滴を繋がれ、いきなり、絶対安静の入院患者となった。大部屋に案内された。私のプライベートスペースは、カーテンに囲まれた三畳ない空間だった。基本的にトイレと食事以外は、起き上がらず、寝たきりの生活だ。お腹の張りを抑える薬が入った点滴は二十四時間の相棒となった。

病棟看護師の中に、五十代ぐらいのFさんがいた。数人居る看護師の中で一際目立って、おっとりして、手際が悪く、不器用な方だった。

そんなFさんは、マイペースで要領が悪い私の母に雰囲気为重なり、親しみが湧いた。そんな目で見ていたせい

か、私たちは、すぐに意気投合し、仲良くなった。私は母に看護してもらっているようで、安らぐ時間を見つけた。

妊娠三十三週目を目の前にした夕方、お腹がカチカチになって胎児の姿が浮き出るほど、子宮の強い収縮が始まった。息が詰まり、下腹部が痛み、今までにない緊張感がはしった。先生が部屋に来て、点滴の量を増やした。そして、これ以上状態が悪くなると、この医院では対応出来ない為、新生児集中治療室が完備されている大きな病院に転院することになると説明を受けた。

入院生活を耐えると覚悟を決め頑張っていた最中、この試練が一番辛かった。

点滴の量を増やされたが、状態は落ち着かず、不安な夜をむかえた。これ以上、安静にすることは出来ない。私に出来ることは見つからなかった。

やるせないさと悔しさと、点滴の副作用で自分の精神状態を制御できなかつ

た。眠ることなど出来ず、涙と鼻水がとめどなく溢れた。そこは、大部屋だ、声を出すことも、鼻を吸える事も、音を押し殺さないといけなかった。

そのまま、夜は明けた。Fさんが朝の回診に来了。私の状態は、引き継ぎで知っていただろう。私は、一目で分かるほど、一晚流れた涙のせいで、目が腫れていた。

Fさんは、不意にベッドの脇に近づいて来て、床にひざを付き、私のお腹に手をそつと添え、お腹に顔を近づけた。

「まだゆっくりしとっていいとよー。貴女のママはすごく素敵よー。優しいママを選んでこのお腹に宿ったんでしょ。早く会いたいの分かるよ。どうせ、ずっとは居られないんだから、もう少し、ゆっくりしといたらー。」

と、子守唄のように優しく心地のいい口調で語りかけた。そして、少し背筋を伸ばして、

「中村さんの子宮さん！ まだ、頑張らないで下さい。もうしばらく、赤ちゃんを優しく包んで守ってあげてください。」

と、祈るように真剣な口調が変わった。私に聞こえるか聞こえないかの小声だった。目を強くつぶったせいで、目頭に沢山のしわができたFさんの横顔が見えた。

Fさんが、慰めでも、気遣いでもなく、心から純粹な気持ちで、胎児と子宮に語っていた。私は、また、涙が溢れた。しかし、さっきまでの涙と違う涙だった。優しさに包まれて、嬉しさで感謝が混ざった涙だった。看護師と患者の枠を超え、Fさんという人の心からの言葉だった。立ち上がり、私に「持ちこたえて欲しいね。」

と、声をかけてくれた。私は、泣きべそをかきながら、大きくうなずいた。それからの私には、Fさんの存在が、強い味方となり、確実に力となった。

なんとか、正期産に達するまで、お腹の中で育てることができた。赤ちゃんが成熟している証といわれる、鼻の上の白いポツポ（面皰）がある程、元気な女の子と出逢うことが出来た。

Fさんは、とても喜んで下さった。辛かったはずの入院生活の中で、心に残るFさんとの出逢いがあったことに感銘を受けている。





入賞作品

一般の部

優秀賞



糟屋郡篠栗町

郡島 久美子 (62歳)

「夫のカルテ」

四年前五十九歳の夫は、行きつけのカラオケ店でいつもの声が出ず、クーラーがやけに喉を刺激するので翌日受診した。翌週の精密検査も一人で受診し、病名を洩る医師を追及し肺がんの宣告を受けた。「俺は絶対死なない、死んでたまるか。俺なりの治療をす

る。」と私に宣言した。

頑固で偏屈ときている。徐々に身体の痛みを訴え、処方された鎮痛剤の効果が薄れ夜間不眠が続いた。ある日、「早く帰って来てくれ、頭が働かなくなった。」痛みと不安でパニックになったらしい。直ぐ受診し暫く通院したが、鎮痛剤の服用間隔は短くなり、痛みも我慢の限界を超えついに入院することになった。食欲は徐々に低下し身体は痩せ細り足取りも覚束なくなった。

意識が薄れていくある日、看護師さんがベッド柵を静かに取り外しながら言われた。「ご主人との距離が近くなりますね。」夫とは柵越しに接していたが、それ以来何の障害もなく夫と触れ合うことができた。何度も心の中で呟いた。「ご主人との距離が近くなりますね。……」仕事と介護で疲れ切った心に沁みわたる素敵な響きを感じた。辛いけど嬉しい気持ちになった。意識が無くなり、口が半開きになり口腔が

乾燥している。歯科衛生士さんには丁寧に関心ケアをしていただき、傍らでそのやり方を教わった。あるとき、洗浄液にミントの香りがする。看護師さんに尋ねると、さりげなく「いい香りでしょう。」爽やかなミントの香りがここに沁み渡っていく。辛いけど幸せな気持ちになった。

私は、夫の発病前から大学の通信教育を受けていた。夫は自分の葬儀と私の卒業試験日を気に懸け、受験日まで延命したいと主治医に哀願していた。試験当日の朝五時枕元の携帯電話がなった。「危篤です。」受験を諦めるかと思いつつも受験票と筆記用具をバックに入れ病院に急いだ。病室では息子そして主治医と看護師さんが私の到着を待ち構えてあった。「母親には電話しないようにお願いしたのに……」。僕が看ているから受験しておいで。受験しないとお父さん悲しむよ。お父さんの遺言だろう『受験するように』っ

て。」主治医や看護師さんの後押しもあった。「ご主人の遺言です。受験してください。」

翌日も試験があり病院経由で受験に行った。「試験中にもしものことがあっても電話しないで。試験が終わったら私から電話するから。」と息子に告げた。今にして思えば非情で非常識な言葉である。試験終了後息子に電話した。「お父さんは大丈夫？ お蔭で無事受験できました。ありがとうございます。」

息子「大丈夫、僕が看ているから。ところで今日はバレンタインデーだからチョコレート買っておいで。」

私「そんな時間ないよ。一刻も早くお父さんにお礼を言いたいのに。」

息子「いいから買っておいで。」電話は素っ気なく切れた。

病院に向かいながら涙が溢れてきた。「貴方ありがとう。お蔭様で無事受験できました。夫不孝でごめんなさい。」涙は拭いても拭いても止めどなく頬を

流れていく。夫や息子への感謝と詫言の複雑な涙が泉のごとく湧き出てくる。それでもチョコレートが気になりコンビニに寄った。二月十四日バレンタインデー当日の午後、売れ残りの中から最上級の五百円のチョコレートを購入

し夫の枕元に感謝を込めてそっと置いた。それから数日間意識のない夫は、試験は終了したのに息をし続けている。心身とも疲れ切った私は、とんでもないことを口走ってしまう。「もう、そ

んなにがんばらなくても……」危篤状態のなか受験させてもらいあんなに感謝したのに、今私は掌をひっくり返したように豹変している。自分が情けなく許せなく、看護師さんにそのことを伝えると、「人は誰でもわがままです。奥さんだけでは不十分ですよ。」懺悔の日々が続いていたが、救われる気持ちにもなった。

夫が亡くなり一か月後大学の卒業式があった。やっと手にすることができ

た卒業証書、その写しを病棟に持参した。夫のカルテには厳しい心身状況が克明に記録されている。夫は自らの命を生きたのであるが、私の卒業試験を気にしながら精一杯生き続けた。生きる目的があれば命尽きるまでその過程を懸命に生きることができるとはいかた私の身勝手な思いで、生前主治医に依頼していた。「カルテに卒業証書を綴じてください。」卒業証書は、カルテの目的からすると何の意味も見いだせない。それでも主治医は、私の想いをカルテに綴ってくれた。家族は運命共同体であり、家族の誰かが病気すると他の家族も病人になってしまう。主治医や看護師さんには、家族の想いを充分察してもらいたい生涯忘れられることのできない言葉や優しさをいただきました。ここから感謝しています。東京在住の息子は帰郷の度に病院に向き看護師さんに近況報告をしています。



入賞作品

中高生の部

最優秀賞



北九州市・中学3年
小野 愛来 (14歳)

「独りじゃないよ」

「お腹イタイ……」秋も深まる十月のある日から、私の口ぐせは「お腹イタイ」だった。はじめは、とりあえず市販の薬をのんでなんとか過ごしていた。だが、年をこえて四月、私は授業さえまともにうけられなくなっていた。原因は昨年から続く「腹痛」。ここで、

私は初めて病院にいった。先生によると、別に体に異状があるわけではないそう。じゃあ、なぜ……？「あなたの腹痛はストレスによるものです。だから心配する必要はないでしょう。」そう言われた。たしかに、生徒会の仕事と部活動、そして勉強の両立で疲れもたまっていたのかもしれない……と思う、しばらくは無理をしないようにして過ごした。

しかし、症状は良くなるどころか悪くなる一方、三年間の中ではじめて早退し、次の日学校を休んだ。

とうとう市販の薬も効かなくなり、病院で処方してもらった薬を毎日、錠剤を九錠、粉薬を三袋のんだ。でも効果はみられない。「もういやだ、なんで治らないの」と毎日悩んだ。でも「そんなの気のせいよ……精神力よわいなあ……」と心ないことを言ってくる人もいた。もう限界だった。おなかが痛くなることで部活の仲間にも、生徒

会の人々にも親にもたくさんの迷惑をかけてしまう自分自身にも腹がたつた。いつの間にか弱音も吐けなくなっていた。

そんな時、私に手をさしのべてくれたのは、ある一人の先生だ。ある日、私は再び行きつけの病院にいった。症状が治らない、もう限界だと伝えると、その先生は近くの心療内科をすすめてきた。最初は行くのをためらった。私の中で心療内科は、精神的に病んだ人が行くような所だと思いこんでいたから。でも、もうそんなこと言っていられなかった。

そして迎えた診察の日。親には迷惑をかけたくないので一人で出かけた。ドキドキしながらドアの前に立つ。一度、深く深呼吸をしてドアをあけた。受けつけに向かう。あと十分待ち時間があつたので、待ち合い室のいすに座ってまわりを見回した。若い女の人から車いすに座った人、年輩の方、一

見こわそうな男の人、様々な人がいた。私は緊張して、ただただ、「私はどうなるのだろう。」なんてことを考えていた。

「小野さん」

名前を呼ばれて思わず大きな声で返事をした。赤くなりながら診察室へ入った。

「こんにちは。お名前は？」そう聞かれてまだ緊張したまま「オノアイリです。」と答えた。さて、どんな質問をされて、どんなことをいわれるんだろう……と不安をつのらせていると、「へー！ すごい良い名前だね!! 愛が来る、いいね!!」……？ ちよつと拍子ぬけだった。あまりに先生がゆるいから。「で、何才？ 部活は？」淡々と質問に答えていく。途中、雑談、笑い話も交えながら。そうするうちに、緊張なんて吹き飛んでいった。そして本題。「どんなことがストレスなの？」とか「何かつらいことでもあった？」

などは聞かれなかったが、先ほどの質問から先生は何かを察したらしく話した。

「愛来ちゃんは、一人でがんばりすぎちゃうタイプでしょ。甘え下手なのかな。先生、まだ愛来ちゃんと出会って数分だけど、愛来ちゃんのそういう一生懸命さとか伝わってきたし、すごくいい子だなって思うよ。でもね、苦しみや痛みとたたかうのは一人かもしれないけど、独りではないんだよ。もっと頼っていいんだよ。」気づいたら目からは涙があふれていた。たったこれだけの言葉で、とても楽になった気がした。「独りじゃない」この言葉にどれだけ救われたことか。「ありがとうございました。」何度もそう言って先生と別れた。

次の日、何カ月ぶりだろうか、お腹が痛くならなかった。私は再度、「ありがとうございます。」と心の中でお礼をした。

今、私が前のように健康でいられるのは先生のおかげだと言っても過言ではないと思う。あの日以来、先生とは会っていないけれど、つらくなったり、不安になったりした時は「独りじゃない。」という先生の言葉を思い出している。

ありがとう、先生。





中高生の部

優秀賞

北九州市・中学2年
川端 君佳 (13歳)『おいしやさん』
への手紙

年末の大掃除をしている時、私はある封筒を見つけた。ピンク色の封筒で、可愛いシールが貼ってある。差出人の所には幼い字で『かわばたきみか』と書いてあり、受取人の所には『おいしやさん』と書いてあった。何だろう、

と私は封を開いた。手紙は、どうやら『お医者さん』に宛てたものの書き損じのようだった。その手紙を読んだ時、昔の記憶がよみがえった。その手紙を出したのは、小学一年生の頃だった。

まだ幼稚園を卒業して間もない頃の私は、よく母に「もうすぐ小学生なんだから」と叱られていた。母に叱られると、私はすぐにお姉ちゃんの所へ逃げた。お姉ちゃんとは、母の姉のことだ。本当は伯母さんと呼んだ方が正しいが、母の呼び方がうつって『お姉ちゃん』と呼んでいる。私が慰めてもらいに行くと、お姉ちゃんは必ず黙って頭を撫でてくれた。お姉ちゃんの手は、柔らかくて温かい。そんなお姉ちゃんが、私は大好きだった。よく一緒にぬり絵をしたり、平仮名を練習したり、折り紙を折ったりして遊んでくれた。

私は小学一年生になった。もうすぐ七夕で短冊に書く願い事を決めるという宿題が出された。私はお姉ちゃんに

相談しようと思って家に帰ると、すぐにお泊まりの準備をした。おばあちゃんの家に着くと、真っ先にお姉ちゃんの部屋に向かった。お姉ちゃんの部屋には、誰もいなかった。台所にも洗面所にも、トイレにもお姉ちゃんはいなかった。

「なんで、お姉ちゃんがないの？」

私は何度も母に聞いた。母は迷ったようだが話してくれた。お姉ちゃんには、『知的障害』があった。幼い頃から、特別支援学級に通っていたそうだ。それに加えて体が弱く、私が生まれる前はよく入院していたらしい。日常生活に支障はないらしいが、そのせいで差別を受けたことも少なくないという。一緒に平仮名を練習してくれていたのも、字を忘れないためだったと後から聞いた。

「お姉ちゃんのこと、嫌いになってない？」

と母に聞かれて、私は泣いた。どん

なことを聞いたって、お姉ちゃんを嫌いなになったりしない。そう言いたかったのに声にならなかった。今までにそれでお姉ちゃんを避けた人がいたというのを聞いた。そのことが、私は悲しかった。

七夕のことを思い出したのは、短冊が配られた時だった。私は迷わず、願い事を書いた。『おねえちゃんがしにませんように』と。短冊を見て回っていた先生は、私の短冊を見て

「お姉さん、病気なの？」

と聞いた。私が小さく頷くと、先生は慰めてくれた。その時、お姉ちゃんの優しい手の感覚がよみがえった。

『やっぱりお姉ちゃんが一番の慰め上手だ』と思って、私は少し泣きそうになった。

お姉ちゃんの病院に行きたい、と私は言い張った。母に叱られても、友達とケンカしても、静かに頭を撫でてくれる温かい手はない。そのことは、私

にとってひどく辛いことだった。だから、私は手紙を書いた。お医者さんに『お姉ちゃんを家に帰してほしい』と伝えるために覚えたての読みにくい文字で、自分の気持ちを精一杯伝えようとした。誤字を訂正せず、手紙の一部を抜き出すと、こんなことが書いてある。『わたしが、おねえちゃんのめんどおみます。ずっと、ておはなさないます。ごはんとか、おふろやといれのおせわもします。だから、おねえちゃんをかえしてください。』そんなことが書いてある二枚の手紙。私はそれをお医者さんに渡した。お医者さんは、私の手紙をその場で読むと、私の頭をくしゃつと撫でた。

「お姉ちゃんが大好きなんだね。」

そう言われて私が深く頷くと、

「早く家に帰れるように、お姉ちゃんも先生も頑張るからね。」

お医者さんは優しくにつこりと笑ってくれた。家族に隠れて手紙を渡した

私は、お医者さんに話を聞いた母に困ったような顔をされた。でも母は、その後すぐに「ありがとう」と抱きしめてくれた。母の腕の中は、お姉ちゃんの手と同じように温かった。

それからしばらくして、お姉ちゃんは退院できた。お姉ちゃんの退院の日、私は病院に行って、お医者さんに「ありがとう」と言った。お医者さんの反応は覚えてないが、きっとあの時みたいに優しい顔で笑ってくれたと思う。

お医者さんはすごい。私の大切な人を元気にして家に戻してくれた。あの優しくて頼もしい笑顔を、私は一生忘れないと思う。





中高生の部

優秀賞

北九州市・中学2年
岸本 妃呂子 (13歳)

「感謝」

私が産まれたのは十三年前にさかのぼる、二〇〇〇年十二月三十日のことである。私は大晦日の前日の寒い日に誕生した。しかし、私は、普通の家庭にあるような、元気な出産ではなく、予定日を

二ヶ月も早く産まれた早産だった。母に急に陣痛が始まった。父は薬をとりについており、家の中は二才の姉と父の帰りを待つことになった。しかし、陣痛の間隔が少なくなり、痛みはますますひどくなるばかりであった。父が薬をもたらって、帰ってくると同時に私がこの世に産まれた。母は手が震えて、一一九のプッシュホンがうまく押せなかった。私は産まれても泣けなかった。救急車が到着し、救急隊の方から適切な処置が施され、救急車で産婦人科へ向かう。

産婦人科の病院で待っていたのが、K病院の救急車、ドクターカーである。重症の新生児の酸素を補う為の保育器を準備して、小児科医のY先生が待ってくれていたのである。

私は、そのドクターカーに乗り

保育器の中に入り、先生、父、姉とともに、K病院へと向かう。

私の体温は三十二・六度まで下がり、危険な状態だったそうだが、体温は、一気に上げることができない。少しずつ、少しずつ、平温へ戻す。

私は、K病院のNICU（新生児集中治療室）に二ヶ月入院することになった。この間、父は仕事へ行く前の早朝、夜、深夜と三度、二ヶ月間かさず、私が口では飲めずに鼻からのチューブで体に取りこむ母の母乳をパックに詰め持ってきてくれたそうだ。

今、私の手許には、一冊のノートが残っている。それは、看護師さんが、私が入院してから退院するまでの日々をつづったものである。そのノートには、父や母を励ます言葉、私自身を応援する言葉、

かわいい絵、そして何枚もの写真。

私の鼻の中に、チューブが入っている写真、母がほ乳びんを私の口に入れてくれている写真、そして看護師さんが私を囲んで、にっこり笑っている写真、宝物である。

私は四年前K病院を訪れた。私の命の恩人であるY先生に会うためだ。私は、私のことを覚えていなくても私の命をすくってくれた先生にあいさつしたいと思いながら、小児科病棟へと向かった。

「Y先生いらっしゃいますか。」

目の前に優しそうな男の人が現れ、父が一言、

「妃呂子が産まれた時お世話になりました。」

先生はうなずいて

「大きくなりましたね。」

この言葉は一生忘れないと思う。私は、父、母の話と体験を通して、

命の尊さを身を持って感じた。Y先生、看護師さんなど、たくさんの人たちの支えによって助けられた命。精一杯、生きようと思う。





小学生の部

最優秀賞



福岡市・小学2年
角町 玲葵（8歳）

「まつお先生は
まほうつかい」

「今日はどうしたの。」

まつお先生のやさしいかおを見ると、わたしはそれだけで、あんしんして、なんだかびょうきがなおった気がします。

まつお先生は、まほうつかいで
す。

まつお先生は、わたしが小さい
ころから、びょうきのとき、いつ
もみてもらっているおいしやさん
です。

ねつが出てきついとき、せきが
でるとき、わたしは、

「まつお先生のところに行きたい、
先生たすけて。」

と思います。先生に会ってしん
さつしてもらうと、すーっと心が
おちつきます。そして、びょうい
んからかえる車の中では、もう、
少し、元気になっています。

よぼうちゅうしゃも、いつもま
つお先生のところで行きます。わた
しはいたがりなので、ちゅうしゃ
がこわくて、しかたがありません。
でも、先生がすると、まほうをか
けたみたい、まったくいたくあ

りません。いつはりをさしたかも、
わかりません。本当にふしぎです。
わたしは、いつもにこにこわ
らっている先生が大すきです。
わたしも、しょう来びょうきで
こまっている人を、たすけてあげ
たいです。いつもえがおで、かん
じゃさんをむかえたいと思います。
そんな、まつお先生みたいなおい
しやさんになりたいです。





入賞作品

●小学生の部 優秀賞 — 「おじいちゃんとの別れ」

小学生の部

優秀賞



久留米市・小学5年
香月 凜保 (11歳)

「おじいちゃんとの別れ」

運動会の翌日、おじいちゃんが天国に行きました。小学二年生の運動会の翌日、私は、友達と一日中遊んでいました。

友達と「この病院におじいちゃんが入院してるの!!」と病院の建て物を見ながら話した後にお母さんから友達のお母さんに「おじいちゃんが死んだから帰っておいで」と

電話が入った時の事をつい、先日の事のように覚えていきます。

私が2才の梅雨が明ける頃に、おじいちゃんが入院しました。貝を食べて食中毒が原因による肝ぞう機能の低下と、合ぺい症により7ヶ月間の入院生活を送りました。

初めは、救急車で救急病院へ入り、たくさんチューブにつながれ、話しをする事も出来ない、私は面会も出来ませんでした。少し落ちつき、一般病棟へ移り私もやっと、面会に入れるようになりました。

お母さんが働いている病院に遊びに行く感覚で足を運んでいた様なものでした。実は、その頃の事はあまり覚えていません。退院に向け、おばあちゃんは仕事をやめ、お母さんは、ケアマネージャーとしておじいちゃんが家で暮らしやすい様に手すりをつけたりと皆でおじいちゃんの帰りを待ちました。

病院では、リハビリの方や看護師さんが、日常動作訓練をやり、杖で歩けるまで回復しました。

おじいちゃんの性格、おじいちゃんが好きな事、嫌いな事、何でも知ってる、ケアマネさんが、おじいちゃんに一番合っている、デイサービスを選び退院と同時にスタートしました。その頃のおじいちゃんは、昔の

怖い怖いおじいちゃんではなく、ニコニコ優しいおじいちゃんになっていました。

認知症の症状もあり、デイサービスに行っても「帰る」と言ったり、家にいても「帰ろうか?」と言う事があり、私はおじいちゃん「何言ってるんだろう?」「どうしてわからないのかな?」と時には、私の方が怒りたくなる事がありました。

それでも、デイサービスの職員の方々は、おじいちゃんにあわせて怒る事もなく接していました。

私が小学一年生の秋に肺炎になり、入院してから、二時間おきのたんの吸引、吸入と介護量が増え、おばあちゃん一人の介護力では家でささえることがむずかしくなりました。

自動車に乗れないおばあちゃんは、毎日自転車で四十分かけ、となり町の病院まで顔を見せ体をふき、お世話をしていました。学校が休みの日は、私も一緒にバスやタクシーで病院へ行く事が日程でした。私が一つ心残りなのが病室がくさいなど文句をつけて、病室に入らなかつたことです。今の私は、それだけが心残りです。運動会の翌日十月二日おじいちゃんは静かに天国へ旅立って行きました。

運動会が近づくと、いつも思い出します。



小学生の部

優秀賞



北九州市・小学6年
小浦 那実 (12歳)

「病院でのこと」

「〇〇さん診察室へどうぞ」

「次の方、どうぞ」

わたしは、ある検査で病院の待合室にいた。初めての、総合病院で、何をするの、何が今からあるのと、心臓はドキドキ、手は、あせで、

びっしりだった。

「お願いします。」

「大丈夫ですか」

「〇〇さん、お待たせしました。」

「〇〇をお返しますね。」

「ありがとうございます。」

「席に座ってお待ちください。」

「もう終わったので、大丈夫ですよ。」

「〇〇におこしく下さい。」

「おだいじに。」

ていねいで、はっきり、やさしく、きがるに、分かりやすく話しかけてくれて、言いたいことがよく伝わってきた。何事にもていねいに取組んでいる看護師さんに、びっくりした。

ドキドキして待つ、私の心を、少しほぐしてくれた。

「小浦さん、お入りください。」

怖そうなお医者さんかと思った

けど優しいような女医さんだった。

何をするか、理由や例をいれて説明してくれた。それも、一つずつていねいに、優しい言葉使いだった。分からないことは、わかりやすく、質問をしてもよくわかった。

今回の体験で、私の中の病院のイメージが少し変わった気がする。そして、常に身近にある病院がこんなにすごかったなんて今回の体験がないとわからなかったと思う。

ちなみに、私の検査結果は問題がなかった。



表彰式の様子

(平成27年1月10日(土) 福岡市・エルガーホール)



一般の部・最優秀賞 松本悠 さん



一般の部・優秀賞 中村沙世子 さん



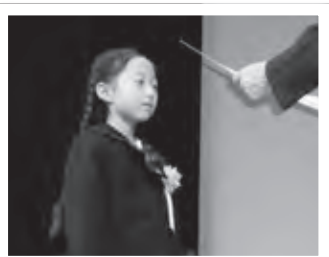
中高生の部・最優秀賞 小野愛来 さん



中高生の部・優秀賞 川端君佳 さん



中高生の部・優秀賞 岸本妃呂子 さん



小学生の部・最優秀賞 角町玲葵 さん



小学生の部・優秀賞 香月凜保 さん



小学生の部・優秀賞 小浦那実 さん

選考委員

福岡県教育委員会

丸山 晴幹

福岡県医師会副会長

蓮澤 浩明

西日本新聞社生活特報部長

長谷川 彰

福岡県医師会理事

東 秀樹

有識者

林田 スマ

福岡県医師会理事

馬郡 良英

福岡県医師会広報委員会委員長

高嶋 雅樹

福岡県医師会理事

山家 滋

福岡県医師会理事

半井 都枝子



募集要項

- 「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、お医者さんや看護師さんとのふれあいなど、医療・介護に関わる体験記を募集します。
- 400字詰め原稿用紙3枚～5枚以内（1,200～2,000字）
鉛筆（B、2B）／ボールペン／万年筆／パソコン／ワープロのうち、いずれかを用いて、濃くはっきり書く。
※パソコン・ワープロの場合、1ページ400字（20字×20行）。
- 表紙をつけて、部門、題名、〒住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、所属、電話番号、FAX番号を明記して下さい。
- 福岡県内の学校に在籍する児童生徒、および一般県民
※医師を除く
- 自作の未発表作品に限り、盗作、二重投稿は固くお断りします。
※応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
- 応募作品は返却いたしません。
- 入選作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。
※そのため主催者、後援者がインターネット上で開いているページや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
- 【一般の部】最優秀賞 1名（副賞：現金10万円）
優秀賞 若干名（副賞：現金3万円）
【中高生の部】最優秀賞 1名（副賞：図書カード5万円）
優秀賞 若干名（副賞：図書カード2万円）
【小学生の部】最優秀賞 1名（副賞：図書カード3万円）
優秀賞 若干名（副賞：図書カード1万円）

【問い合わせ】福岡県医師会総務課 作文コンクール係（TEL 092-431-4564）

主催：公益社団法人福岡県医師会

共催：福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援：福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、
北九州市教育委員会、朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社（順不同）

平成27年3月発行

公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564 FAX：092-411-6858

